



両親は戦後間もない頃から、天神橋筋商店街の一角で食堂をやっていました。井物すし、鍋物、中華と何でもある。50席ほどの店内で、職人や洗い場のおばさんたち20人ぐらいが働いていた。

昭和30年（1955年）、4人きょうだいの末っ子として生まれる。天神橋筋商店街（大阪市北区）は、天神祭で知られる大阪天満宮のひざ元にある。

小さい頃は甘えたかったから、両親の部屋が僕の居場所。厨房の片隅を、カーテンで



両親が営んでいた昭和30年頃の食堂

フジオフードシステム社長 藤尾正弘さん 55 田

出前で学んだ商売の厳しさ

仕切っただけの部屋で、料理の音やにおい、空気を感ずながら育ちました。

おやじは料理人ではなく、食材を仕入れたら、職人をまとめたり。お母さんは朝から晩まで店を離れることはなく、外に出るのは軒隣の銭湯に行く時だけ。ずっとレジ

を守り、店を仕切っていました。とにかく両親は一生懸命働いていた。朝6時頃から仕込みが始まり、店が終わるのは午前1時くらい。年中無休。僕が遅くまで遊んで、帰り道が真っ暗になっても、店の明かりがこうこうとしてたの

で、すぐにわかった。それで生活が豊かになったわけではありません。何も無い時代でしたから。でも、何かがあった時代だったと思います。

小学5年生から、出前の手伝いを始めた。法被姿で大人

用の自転車に乗り、出前盆を肩のせて注文の品を運ぶ。失敗もたくさんした。

砂利道が多くてね。バランスをとっても、うどんの汁をこぼしたり、井を落したりもしました。新しいマンションに出前し

た時のこと。エレベーターに乗ってお客さんの部屋まで行った。うどんか、ラーメンかは覚えていないけど、渡すと汁がなくなっていた。当時はラップはないから木蓋。

「ふいていけ」と。見ると、きれいな廊下です。と汁がこぼれている。四つんばいになって、長い廊下を歩きました。終わって管理人さんにどうきんを返すと、今度は「ゆすいでしぼらんか」と。

「あいつや掃除の仕方を教えてもらいました。みんながかわいがってくれました」—長沖真未撮影

が近くなったら、涙を見せるわけにはいかない、と思うわけです。法被で涙をふいて店に入ると、お母さんとはっと目が合った。優しい目でした。ね。何も言わなくても、わかってきている。「お疲れさん」と、ひと声掛けてくれました。

大みそかは、年越しそばで特に忙しかった。同級生の家に行く、家族で紅白歌合戦を見る。年が明け、みんなが天満宮に初詣に出掛ける頃に、出前をした鉢を取りに行く。その時の寒かったこと。手はかじかんでました。

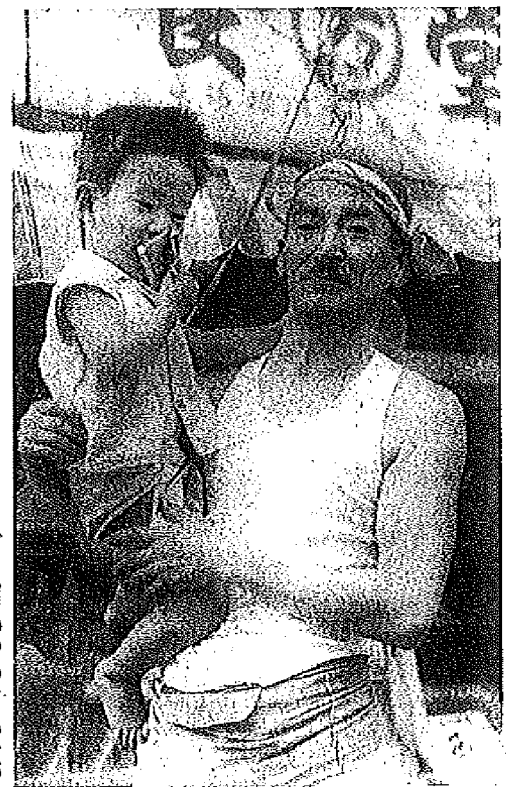
出前をしている人々と出会い、いろんな言葉を聞いたなかで、商売の厳しさを学ばしてもらいました。

（聞き手・古岡三枝子）



「商店街の中で、あいつや掃除の仕方を教えてもらいました。みんながかわいがってくれました」—長沖真未撮影

ふじお・まさひろ 追手門学院大学で経済を学んだ後、24歳で独立し、キッチンバーを開業。その後、業種を広げ、1988年に始めた大衆食堂「まいどおおきに食堂」を中心に、現在は26業態、海外を含めると710店舗を手掛ける。2008年から母校の客員教授を務める。



父・正雄さんに抱っこされた1歳頃の藤尾さん。「大好きな天神祭の日に撮ってもらった特別な写真です」



僕は、おやじが50歳の時の子で、おやじっ子でした。忘れられないことがあります。

小学2年

生の頃。学校の先生に「お父さん

に書いてもらってください」と住所などを書く紙をもらった。朝、見るとお母さんのきれいな字なんです。僕は「学校行かれへん」とごっつい泣いて、「おやじだ」「あほー」と言った。

ある日、学校から帰ると、おやじがせんべい布団に寝な

がら何かやっていた。僕に気が付いてはっと隠した。気になり、おやじが出て行ってから見ると、汚い字で紙に「あいさとお」と書いてあった。

おやじは大変な時代を過ごし、学校に行けていない。おやじは字が書けなかった。僕は「いめんなさい」と頭を下げました。おやじは一生懸命練

習したんでしょうね。3年後にはきれいな字を書けるようになっていました。

3年生の時には右耳を手術しました。慢性の中耳炎で、以前から痛かった。おやじは名古屋、東京、とあちこちの病院に連れて行ってくれ、手術せずに治る方法を探してく

れました。けれど、手術しがなく、全身麻酔を受けました。その時のことを、20年以上たって、おやじの葬儀の席でおじさんから聞きました。おやじは、寝ている僕のそばで「俺の耳を、この子につけてやりたい」と言ったそうです。泣きましたね。厳しい人でしたから。面と向かって言わなかったけど、やっぱり心配してくれていたんです。

手術後、痛みは消えたけど、音は聞こえにくくなった。おやじが買ってくれた補聴器をつけましたが、雑音が入り、頭が痛くなる。友達も「それ、なんや」と言うので、つらくなって、一緒に遊ぶのが嫌になりました。

それで、近くの大阪天満宮に行き、一人、境内の砂に富士山の絵を描いたり、字を書いたりするようになった。そこにいると神様が守ってくれているような気がしてね。

高学年になる頃には耳の状態はよくなり、補聴器はいらなくなりました。僕を支えてくれた天満宮は今も、心のよりどころです。

おやじの優しさを忘れない

(聞き手・古岡三枝子)

おばちゃんの温かさ大切に

両親の食堂に住み込んで働いていた人の中に、「まさえさん」というおばちゃんがいまいた。僕とは三回りほど年が離れていて、いつも僕をかわいがってくれた。一緒に寝るようになりました。

おばちゃんはいつも、布団の中で泣いていました。気の強い職人たちといろいろあったのだと思います。僕が小学5年生から店の手伝いを始めたのも、「おばちゃんに喜んでほしい」という気持ちがありました。

中学校に上がってからは厨房で包丁を持つようになりました。職人にもまれながら、井物、洋食、中華、何でも作り、すしも握れるようになりました。



大学では経済を学び、24歳でキッチンパーを始めました。その後、カフェやパブ、お好み焼き屋と広げ、30歳で40店舗を持ちました。

転機は32歳、おやじが亡くなった時でした。お母さんはすっかり落胆していました。当時、実家の食堂はすし屋になっていたの、「なんとかお母さんを元気づけたい」と思い、実家近くにオープンさせたのが、「まいどおおきに食堂」の1号店です。

看板やメニューは全部、僕が墨で書いています。「あつたかろい。味噌汁」「おふくろの味。肉じゃが」。食べもん屋の文字は、胃袋に感じるもの。その店を表さんといかん。

「まいどおおきに」は、お母さんが食堂でいつも言っていた言葉。お母さんの声や笑顔を、温かい字体で書いてます。食堂で働いてくれているのは、中高校のおばちゃんが多い。おばちゃんたちは料理がうまいし、いてくれるとほっとする。僕は「働ける限り働いて」と言ってます。80歳を超えた方もいます。

たくさん店を作り、たくさん人の雇用を生む。僕にとってのゴールです。高齢者の雇用にこだわるのは、まさえおばちゃんから。人は支え合い、触れ合いながら生きていく。両親の食堂や商店街から学びました。「まいどおおきに食堂」もそれぞれの町で、そんな場所になってほしいですね。

(聞き手・古岡三枝子)

「高齢者が元気で働ける場を作っていきたい」

